

# 『女の声』

ジャン・コクトー“*La Voix Humaine*”による

高坂文雄

森崎和江に

## 序文

女はすでに別れる決心をしました。彼女のお世辞も、他人行儀も、時折り現われるかつての親しさをしのばせる口調すらも、その決心の固さを暗示しています。同時に、男に対する恋人の精一杯の誠実さも示しています。この点では、外見の対照的であるにもかかわらず、原作『声』のヒロインと一致しています。

これも原作と同じく、些細な言葉の重複、読めば目障りな繰り返しも、作者の計算です。

なるべく安易な音便が起きないような言い回しを選びました。上演にあたっては、演技の自然の勢いで音便現象が起きることは許容しています。

## 装置

幕は最初からあがっている。こじんまりした空間。一人住まいの女の寝室。片付いたベッド、上に服が投げ出している。机と椅子、小さなソファ。鏡台。

机の上には、開いたままのノートパソコンやありふれた観葉植物。サイドボードとその上のコンパクトなステレオ。そのほかテレビ。電話機。デジタル時計など。

となりが小さなキッチン。冷蔵庫や食卓などが一部見える。正面短い廊下の奥に玄関。部屋と廊下の境にある格子ガラスの入ったドアが開いたまま。

下手に大きなガラス戸。カーテンが引いてある。

ほの暗い部屋の佇まい。窓の外に夕暮れが迫る気配。かすかに賑やかな話し声が近づき、遠ざかる。遠くでクラクションの音。

靴音が近づき、鍵が差し込まれて扉が開閉する音。スイッチの音がして、奥から舞台に明かりが差し込む。紙袋を探るらしい音。  
やや長い間。

女が入ってくる。部屋のスイッチを入れ舞台が明るくなる。女は黒いコートを着ている。テーブルにバッグと紙袋を投げ出すように置いて、となりのキッチンに入る。スイッチの音がしてそちらも明るくなる。再び現われると、コートを脱いでベッドの上に投げ出す。喪服姿である。

先ほど入ってきた玄関側に戻って別の部屋に入ってスイッチを入れる。そちらが洗面所らしい。水を使う音。戻ると、喪服を脱いでゆったりした部屋着に着替える。服を片付けていると、携帯電話がバッグの中で鳴る。

（以上は、導入部として一例を示したものです。以下の台詞で言及のある事実や行為を除いて、必ずしもこのト書きどおりである必要はありません。装置についても同様の考え方で対処してください。）

「はい、もしもし。……………ええ、やつと着いたわ。もう大丈夫よ、何度もごめんなさい。結局、送迎バスの中に二時間近くいたわ。……………ええ、初七日まで全部すませてきました。……………ええ、ありがとう。でもくたくただし。半端な時間に食べたから、おなか空いてないのよ。……………もう何年も会わなかった人に会ったりして、ずいぶん変わってしまった人もいてびっくり。人って、あんなに変わるもんなのねえ。……………まさか、そんなこと聞けるわけじゃない。……………そのままいいかしら。いま、どちら。……………なんなら、2-1-9-8の方にかけておしてくださいってもいいわよ。……………ええ、でも、私も携帯の方がいい。あちらでは、気軽に動けないし」

そう言いながら、ハンガーにかけた喪服を片付ける。次の台詞はソファに坐ってから。

「……………どういたしました。……………前にお話したと思うけど、息子さんが一人いるの。これから心細くてかわいそうね。……………いちおう面倒見てくれる親戚は決まっているそうですけど。……………ええ、もとの亭主も

来てたけど、彼が面倒見るわけじゃないの。………  
………息子さん、やはり亡くなったらがっくり来たようで、今日  
日はかわいそうだった。………そうね、比  
沙子さんも、息子さんのこと心残りだったでしょうね。………  
………さあ、なぜなのかしら、私もよく知らない  
の。比沙子さんも、それについて触れられなくなかったよう  
だったから。息子さんのほうは、あまり父親って気がしない  
のかしらね、今日はそれどころじゃなかったでしょうけど。  
………ええ、そうかもしれません。………  
白血病って、白血球が増えすぎて本当に血が白くなってしま  
うんですって。………もう駄目だ  
と思っただけ、ずいぶん長いこと比沙子さん頑張っただけ、お医  
者さんも驚いていたらしいの。息子さんも、話はいちおう聞  
いていたらしいけど、それで希望を棄てられなかったのね。  
………私は、もう十年以上の付き合いですも  
の。………ええ、それにね、あなたも親しみ  
以上のものを感じていらしたようだし、私、悲しくて悲しく  
て、それで、少しあなたにそれを分け持つてもらえるかしら  
と思っただけ、少しあげたの。………ええ！もう二週間もた  
つ？ そんなにしばらくぶりなの。………  
………あ、ええ、ごめんなさい。驚いて考えてたの。………  
………ここんところ、比沙子さんのことで頭がいっぱいだ  
つたし、だからかしら。………また、悲しくなっちゃっ

た。」

「………亡くなる数日前から私も亡くなる日  
まで毎日お見舞いに通ったんです。むくんで膨れてしまった  
足をさすって、………悲しくて悲しくて、涙  
が止まらなかった（女は目元を拭う）。………  
いえ、上気した表情でうつらうつらして、ほとんど私の  
こともわかっていなかったと思います。………  
………（わたし頑張るんだ）って気丈なことを言っ  
たんですけど、ネットでいろいろ調べて、印刷して持って  
いてあげたりしたんです。でも、やっぱり駄目でした。あ、  
これは前にあなたにお話したことでしたね。」

「………え、まさか。  
メール差し上げたじゃありませんか。死んだ人にメールを出  
すはずないじゃありませんか。なぜ、あなたを私が殺すん  
で？ ……どうして笑うのかしら？ むきになつてな  
んかいません。………そんな言い方やめ  
てくださいな。」

「………ええ、そうね。なんと  
疎遠になるなんて嫌です。だからといって、別れる、とも  
思いたくなかったかもしれない。………ふふ  
ふ、そうね。ごめんなさい。………白状し

たなんて、ひどいわ。こうして少し時間をおいてまたあなたとお話しできてよかった。まだ少しも時間が過ぎたと思えないのに、やはりいくら冷静に見られるようになっていいるのかもしれない。……………虫がいいと思われるでしょうかもしれないけど、私はできれば、あなたとの間に架かった橋を壊すつもりはないんです、分かって下さるか。あなたを殺すなんてありえないわ。……………そう、あなたとの間が、何を言っても無駄、という状態なんて私には考えられない。」

「……………そうなんですけど、ごめんさい、なんとなく未練がましいけど、封ができないで抛ってます。……………ええ、きつと近いうちに送ります。あの私の好きな服もこちらにあります。……………本当に？……………ええ、ありがとうございます、でも、私が持つていてもあまり聞きそうもないCDもあるし、お返ししなくてはいけません。……………ええ、あの曲は欲しい。」

「……………今さっきね、自分で自分のからだにお清めの塩を振りまいて入ってきましたけど、怪しいものね。昔、両親のからだに面白半分振りまいてあげた時の記憶があるせいなのかしら。」

「……………まさか、泣き虫なあなたじゃあるまいし、もう泣きやしないわよ。……………病気になる前は、よく遊びにきてくれたのに（そつと涙をぬぐう）。お見舞いから家に帰り着くたびに泣いたんですけど……………」

「……………え、どうして？（女は立ち上がったって、部屋を歩き始める）どうして、私があなたを侮辱するの？……………まさか。そんな言葉があるからって、それが何ですか。あなたは本気で侮辱だと思ってるんですか。もう愛してないって、誰が言いました？……………まさか、もうさつき言っただけありませんか。比沙子さんが亡くなっただけです。それ以上の意味はありません。あなたが好意以上の気持を感じていたのは、私そばで見えてよく分かっていました。比沙子さんの方もでしたよ。……………あなたも比沙子さんが危ないってことはご存知だったんだし、最初の入院の時は二人でお見舞いにも行っただけです。お知らせしないわけにはいかない、と思っただけです。それに私、悲しくて悲しくて、あなたにぜひ聞いて欲しかったんです。……………そうでしょ、私が信用できませんか。少なくとも私は、あなたに疑われるようなことは何もしてませんよ。……………ふふふ、だって、あなたは、そうね、ちよつと怪しいところがあったわ。……………」



いたいわけじゃありません。信じてくださるかしら。……  
……そうよ、あなたの大嫌いな感じ方ですものね。時にはまるで臆病なほど、そういう考え方を避けてらしたわ、あなたは。……  
……ええ、そうかもしれない。こんなことを言つて、すでに憎んでいるからかもしれない。……ええ、……  
……ええ……そうかしら。でもね、いつそ憎んでしまえば簡単なのよ。」

「……だつて、そうしたら、私は好きなようにできるわ。それがいいこととは思わないの。……  
……そうじゃないの、一般的な話にしてしまうつもりはないんです。あなたにはイメージが湧かないかもしれないかもしれません。……いえ、そんな意味じゃありません。極端な例ですけど、簡単な話なんです。私はそんな夫婦を知らないわけじゃありません。たとえば、(亭主を尻に敷く)なんて言い方をすることがあるでしょう？ 実際は、奥さんが威張つてるといふ場合ばかりじゃないようですけど、……たとえば、奥さんを立てることを知つていて、外では、尻に敷かれていると言われて平気でいられる男性もいるでしょ？ そういう賢さみたいなものをとにかく言うつもりはないの。……  
……だつて、そういう男性なら、男女の性的な世界ではきつとまともに男性として振る舞えることでしょうけど、その世

界でも徹底的に尻に敷かれて無視された男性もきつといるのよ。暴力を知らないのはいいことかもしれないけど、私はそういう男性に同情しようとは思わないし、一方の女性にしたつて少しも羨ましくない。見ていて同性として気持ちのいいものじゃないわ。……あなたは同情がないというより、単に自分のことで忙しい方なのよね。きつとあなたの周囲にだつて、そういう男女はいるはずよ。……ええ、本当に亭主を無視して好きなことしている女性だつているわ。……  
よ、亭主の方だつて経済的なことやあれこれ考えるから、離婚に踏み切れないだけ、ということもあるでしょ。そういう女性を同性として私は羨ましいとは思わない。当人は気ままでいいかもしれませんが、女性のあるべき姿だとももちろん思えない。……ええ、そうでしょ。同意してくださるでしょ？ 当然といえば、当然の話にすぎないわ。……そう言つてしまえば話は早いけど、そう簡単でもないでしょ？ でも、ここは既婚者のご意見を尊重しなくちゃいけないかしらね。……ふふふ、そうよ。ちよつとあなたには都合の悪いところに入り込んだかもしれないわよ。……いいの、そんなところであなたを問い詰める気持ちはないわ。あなたを非難する資格が私にあるとも思いません。……もちろん、それは冗談よね、私はそんなことはしませんでしたよ。……

……そうよ。こそこそ浮気する男の話なんて、お互いもとも興味ないんですもの。……そうかしら、今お話ししたような男性は、きつと別の結婚をすれば幸福になった……というものでもないのよ、きつと。女性の方も同じこと。そう思いませんか？」

「……ふふふ、今度は矛先をかえて私のこと？ ……いいの、あなたがそんなこと思っていないって信じてます。……は、〈亭主を尻に敷く女〉より〈浮気女〉と言われる方がずつといいわ。……そうじゃなく、きつと私って古いのね。本を読んでそんな一節だけよく憶えているの。いろいろ辛いことや厭なことが多い人生ですもの、楽しまなくちゃ、とか言うの。……そうよ、いいことおっしゃるじゃありませんか。楽しみに振る舞ってる軽薄そうな女性ほど、ひよつとしたら、苦しんでるのかもしれないわよ。……でも、その〈気のいい〉という言い方の中には男の狡さがあるのはご存知なのよね？ ……ええ、そうなの。私自身は、辛いことも厭なことも避けて生きてきた人間でしょうから、そんな意見を言える身分とも思えないけど、苦しい人生であればあるほど、軽やかに楽しんでる女性に会ったら、せめて彼女を尊敬できる女になりたいわ。……

……ええ、いまだきそんな女性が私の身の回りに現われるとは、あまり考えられないですけどね。……でも、男のあなたにそう言われると不服よね、やっぱり女性は男性に比べると、ずいぶんまだ厭なことは多いと思うわ。あきらかにまだまだ男社会なんですよ。」

「……まさか、〈人間きが悪い〉からって不幸を選ぶ女はいないわ。あなたはぜったいに同意しないでしようけど、世間体を気にするのは、本当は男の方だと思うわよ。……まさかじゃないの。女が〈人間き〉を判断基準にしているように見える時って、男性的な見方をしている時だわ、男性的な世間を基準にしている時よ。……意見は一致しそうないわね。……いいえ、もともと女はそんなものを判断基準にできるほど余裕はないのよ。……そんなに女を弱いものと思うとんでもないことよ。女が女を基準に行動するときって、とても強いものよ。私が見ている気持ちいいもんじゃなれないと思っただって、その強さがまともに出ていただけかもしれないわ。」

「……あら、ちよつと待って（女は携帯のディスプレイを読む）。もしもし、ごめんなさい、もういいの。……いえ、大丈夫。なんでしたっけ？」

「……………そうよ、認めるでしょ。  
そうだわ、思い出した。あなたが昔、とてもいい話をなさつたじゃない。一見して母子家庭と分かったという電車のなかで見かけた親子の話。……………憶えてるでしょ？　なんでしたっけ、（そしたらお寿司食べさせてあげる）とか言って説得していたという母親と坊やの話。……………そう、そう。その時、坊やに感じた意志的な強さというのは、母親の強さだったに違いないですよ。……………もちろんあなたはわかりでしようけど、男たちにそれを見苦しいなんて言う権利は絶対がないわ。男たちが氣どつてるだけよ、おまけに無責任で。……………そりゃ、分かるけど。」

「……………そうかしら、本当にあなたに分かるかしら？　……………それは、あなたがおっしゃる（女の考え方）にこだわっているからじゃない？　つまり、それが男の考え方というものかしら？　……………ごめんなさい、そりゃそうですけど、でも、あなたは自分の考えていることを、考えていることというか、考え方を、ある意味で少しも疑っていないと思います。」

「……………ええ、そりゃそうね。私は、むしろあなたがそんなことは考えないだろうと思うだけなの。……………」

……………いえ、そうじゃなくて、もし自分が女だったらなんて考えることはないでしょう？　男の人は、そんなふうに考えたことなんか、きつとないでしょう？　私は自分が男だったら、と考えることがよくあったわ。自分の名前から子の字をとりたいと真剣に考えたことだってあったんです。……………栄子の子を取ってしまいたいと考えたんです。サカエにしてしまえば、男性でも女性でも通用するでしょ。たまたま私の名前がそんなことを思わせただけですけど、でも、とにかく、そんな空想をしたのは事実なんです。そう他人ひとに聞かせてしまえば空想よね。……………」

……………いえ、最近、もうそんなこと考えなくなりました。あなたのおかげだったかもしれない。……………どうして皮肉だと思うのかしら。照れてるだけよね？　私はむしろあなたに感謝してるのよ、本当です。……………確かそうでしたね、でも隠していたわけじゃないのよ、ただこんなことをお話しする機会がなかっただけ。今日がその機会なのかどうか分かりませんけど。……………ええ、分かりますよ、男と女しかいないんだし、籤運が悪かったなんて発想は、ずいぶん淋しい話でしょ。あなたなら、きっとそう言うわね？　女なら女になりきらなきゃ、ね？　それからの話よ、そう言いたいんでしょ？　……………ふふふ、分かるの。……………」

……いいえ、そんなことありませんよ、それは毘だつて、世間的な意味の不幸を選ぶ女だつて、今はたくさんいると思う。そう言えば、同性愛の女性を知ってる友人に聞いた話ですけど、これといった原因がなくても、同性愛者になつてしまう女性だつているのよ。……かしら？ 男社会とまともに向き合わなきゃ駄目だとは、いちがいに言えないわ。逃げる人がいたつて少しもかまわないじゃない？ 私だつて、馬鹿馬鹿しいと思うことはあるわ。もう腹を立てる気にもならないけど……かしら？ あらたまつて考えたら、今じゃ、どちらが逃げてるか分からなくなるほどではないかしら。……いえ、いえ、いえ、同性の友達から聞いた話。男にも女にもすぐくもてる人で、本当に魅力的らしいわ。その友人もぐらつとすると、なんて言つてたわ。……ふふふ、あなたつて人はね、会つてみたいんでしょ？ 駄目よ、男性はイヤなんです。……ええ、どんなに魅力的に見えても、きつと彼女は不幸な人だと思う。生意氣を言うみたいですけどね、なんか、そんな魅力つて、ひどい浪費じゃないかしら。彼女はきつとその浪費にとても苦しんでるのよ。……ふふふ、男性は参るでしょうね、そういう女性に。……いいえ、私には世間的な意味の不幸を選ぶ力なんてないみたい。……残念だとは思わないわ。……自分に正直になりたいだけ、これもあなたの言いそうなことね。……

……私があなたに感謝してるというのは、こんなふう……に異物みたいな考え方も同居させてくださったのが、あなただから、という意味もあるのよ。……男と女のことです。……りや決まつてるじゃありませんか。……あなたはとつてもじ・よ・う・ず・だ・つ・たつていうこと。……ええ、私もそう思う。……そうかしら、そんなほかの男のこと知らなくてもいいんじゃない？ ……ええ、私もそう思うわ、判断できないことないと思う。……ええ、ええ、そうよ。だから感謝を云々したんです（女は目を軽く拭う）。……今ね、お話してて、同性愛の女性のことまた考えたんですけど、彼女つて、浪費しているというより、女らしさの権化なのかしら。だから男にも女にももてるのよ、きつと。……そうね、権化なんてなんだか男社会向きね。ケシンかしら。……駄目・目・な・の、男には興味がないんです。……私ね、やつぱり彼女は不幸だと思うな。女らしさの化身つて、きつと意志を持ってないわ。……そうなの？ ……ふふふ、冗談に聞こえなかつたけど。……だつて、実際問題きつと男性だつて困るわよ。……なによ、急に改まつて、よく分からないわ、どうして逆かしら。……どこが私に似ているのよ？ ……でも、もし男だつたら、という考

えは、少なくとも私の場合、男になりたかったといつてしまえば、それはかなり違うわ。私の考えが中途半端だったのかもしれないけど、そもそも、…なんと言えればいいのかしら、始めからあくまでも仮定の話だわ。…そうしたら、意志がないはずはないと思うけど。…たと言うの？ 違うと思うわよ。…は、なにか病名があったんじゃない？ 性同一性障害でしたっけ？ 男性になりたいと本気で思っている女性が、性的に男性を惹きつけるとは思えない。…女性って、頭にべつたりポマードを塗ってネクタイ締めた男役と、女性らしい女役に分かれるんじゃないの？…もう？ もっと別のタイプの人がいるの？…あなたの言うへ男になりたいと願って、女らしさの化身になる〜というのが、まるで理解できない。そんな同性愛の女性がいるかしら。…あなたのおっしゃること認めるとして、でもひよつとすると、その印象はとても表面的なことじゃないかしら。分かります？…意味じゃありません。実際に彼女は表面的に見えているというっっているんじゃないのかしら？…私には、理解できない。私は彼女はきつととても

苦しんでると思うわよ、やはり、どこかひどく浪費してるんじゃないかしら。」  
「…そう本気で考えになるのが、あなたのやり方。…ふふふ、いいわよ。…それはね、もう何年も前の話になってしまったわ。そんなふうになつてしまった、…自分で驚くほど。…確かに男の真似したって仕方ないですよのね。…うけど、私は男の人に理不尽なほど反撥を感じることもあったわ。もちろん、女なら誰でも反撥を感じるような場面は別の話として、男の人にしてみるときつと何気ないことなの。むしろ好意を示しているつもりだったかもしれないような場面。私がまるでぴんと静電気で弾かれるような反撥を感じたなんて、その時、きつとその男の人は夢にも思いつかない。私も一方でそれが分かるから、そんな反撥をあらさまに見せないように気をつけたわ。そういう私を女らしくて魅力的だなんて言う男がいて、内心ひどく嘲笑したりしてね、そんなの嫌ね。イヤな女よね。…そうね、言われてみれば、そうだったのかしら。今ごろ、そうだったか、なんて遅いわね。…そう

でしたね。これも初めてお話しすることね。……………  
……………そんなことないけど、だって、本当にどこ  
かでいやな女かもしれないと自分のこと思ってたんだし、こ  
んなことなるべく他人<sup>ひと</sup>に話さずにすめば、それに越したこと  
はないでしょ。あなただって、これまで格別そんなことを話  
題にしなかったんだし。…もちろん、隠していたつもりはな  
いのよ。……………うーん、そう  
ね、具体的に例を挙げるのは難しい、急には思いつかない。  
……………ええ、そうなのかも  
しれない、と反省したことはあるの。でもね、そんなに全面  
的に男性不信だったら、あなたとだってお付き合いすること  
はできなかつたはずでしょ。……………そう  
ね、なんと言ったらいいか、たとえば、それが当たり前、と  
いった態度ね、私の気持ちを逆撫でしたのは。……………  
……………どうもありがとう、誉めてくださつたのよね？  
そうよ、そうは見えないでしょ。女は、だから大変なのよ。  
これだって、私あなたに初めてお話しするのよ。同性とだつ  
て、こんなこと話したことないんですよ。……………  
……………ふふふ、そうね、そうかもね。そうだわ、その気持  
ちをなくした男性って、一番いけないのかもしれない。……………  
……………ははは（女はややヒステリックな声をあげて  
笑う）

「……………ええ、分かりました。あとで  
私からかけなおしましょうか。……………そう？  
ありがとう。……………ええ、待ってます。」  
電話が切れると、すぐにどこかに携帯で電話をかける。声の  
調子がかかりと軽やかになる。

「もしもし、栄子。今いい？……………帰りの  
送迎バスが渋滞にはまって、さっき帰ってきたの。ずいぶん  
遅れちゃって、ひどい目にあつたわ。……………  
……………ええ、全然動かないの、渋滞がひどくて。……………  
……………それが、彼から電話が入って。……………いえ、前の彼。  
……………いえ、私がメールで比沙子  
さんのことを知らせたのよ。……………ええ、彼と二人で  
お見舞いにも行つたりしたの、だから……………  
……………そんなことないのよ。案外、むこうでもほっとしてるの  
かもしれない。……………ふふふ、まああな  
たの好きなように考えてちょうだい。それはそうと、明日の  
話だけど、今日は仕事休んでしまつたし、明日はたぶん無理  
だと思う。悪いけど康子と二人で行って。……………  
……………ええ、でも、彼がまたかけ直して来ることになつてるの。  
……………そうじゃないんだけど、もう話す機会な  
いかもしれないんだし、後悔しないようによく話し合つてお  
きたい気持ちもあるし……………また後でこちらか

ら連絡するわ。ええ、じゃあね」

もう一件、電話をかける。

「……………もしもし、栄子です。お電話くださったのに、連絡しなくてごめんなさい。エスさんから電話もらって話し込んでたもんですから。……………いえ、今もう一度電話をくださることになってるんです。……………ええ、どうぞ、納得いくまでお話しさせてくださいな。……………ええ、終ったらこちらから電話します。……………はい、ありがとうございます。じゃあまた。」

リモートコントロールを操作して音楽をかける。キッチンに入って飲み物を持ってくる。

携帯電話が鳴る。急いで音楽を消すが、思い直し、また点けてから電話に出る。

「……………いいえ、いいんです。相変わらずお忙しいようね。……………ええ、そうよ。聞こえます？……………そう、くださる？私もこの曲が好きになってしまったの、でも、お返しした方がいいかしらね。私はきつと聞きたびにあなたを思い出すわ。CDの

ジャケットを見るようにその思い出を見るようになるのかしら？……………とんでもない。厭のはずはないわ。……………いえ、そうね、……………本当に過去にしまっただけか、分らないかならう。……………これから先、そんなことがあるのかしら。……………もちろん、そう願っているんですけど、こればかりは相手のあることですね、あなたのような方が現われるかしら。……………お世辞のつもりはないのよ。……………ええ、そうですね。でも、そんな言い方されると悲しいわ。……………ふふふ、身勝手なものよね。」

「……………私はもちろん、子どもが欲しいわ。……………あなたに分かるとは思えない。とてもほしい。……………でもそう思うほどに、だから作るわけにいかないと考えてしまっただけだわ。……………まだ産める、まだ産める、……………そう思っているうちにもう何年も過ぎてしまったのよ。……………トノガタには都合のいい時代よね、この先、日本も地球もどうなるかわからないから、で女に我慢させられるんですもの。私もそれに騙されちゃったようなものね。……………いいえ、あなたのせいにするつもりはないの、ごめんなさい。……………それに楯突いて、子ども作ろうとしなかったのがいけないのかしらね。……………あなた

との子ども、そう考えただけで、改めて気持ちがぐらぐらしそう。」

「……………ほんとに？　そうは思えないわ。……………そうかしら、男たちが、五十年後のことを本気で考えていると思います？　いえ、五十年どころか、生まれた子供が成人する二十年後を真剣に考えていると思えます？　からだを二つに分けて命を作る女の真剣さで誰が二十年後を考えていると思います？　いつまでたっても、かわりばえのしない力の論理で、悪くなる一方じゃないの。日本どころか、地球すらこの先が心配だわ。男のうち誰が子を産む女の真剣さでそれを気遣っていると思います？　自分のことしか考えていやしないわよ。…ごめんなさい、大きな声を出して……………」

「……………外を歩いていて、元気よく遊んでる子供たちを見ると、この子たちが何とかわしてくれるかもしれない、なんて本気で思うこともあるのよ。だからって、自身のことになると、もう遅すぎる、とも考えてしまうの。……………ええ、両方の意味でね。……………そうね、まだ何年か……………そうよね、電車のなかなんかで重そうにランドセル背負った子供なんか見たって、そんなこと思うもんですか。……………そうでしょ？　……………」

「……いいえ、いざ自分のことになったら自信ないわね。」

「……………まさか、あなたが不倫だなんて思うわけじゃないんですよ？　……………もちろん、私はそんなの別に不倫だとは考えないわ。不倫なんて結局、男社会で男たちが自分に都合よく自分たちの感性で作上げたタテマエの産物だわ。あなただってそう思うでしょ。そのあたり、あなたはぜひぶん率直な方だったと信じているの。ちよつと甘いかしら。」

「……………ふふふ、もう何度もお話したんだから、あなたはよくご存知のことですよ。……………そうよ。私ね、あなたに会うまでそんなにいいものだと思わなかった。……………まるで別世界だったわ。……………そうね、変な言い方かもしれないけど、私も努力したんだと思う。……………結局、あなたがその気にさせてくれたのよ。きつとその点こそ、あなたに感謝しなくてはいけないんだわ。……………いま別世界だとお話ししたでしょ、夜と昼がそんなに違うものだということが驚きだったし、自分でもおかしいけど、しばらく得意だったのよ。……………いえ、たとえば仕事しながらね、まるで無関係だというのに、あれほど深い官能を知っているんだと密かに得意だったの。……………あなた

は恋人として、どれほど、私に自信をつけてくれたか知れないわ。……………そうなの、まるで無関係なことだと自分でも分かっているのに、自慢したいような気持ちだったの。……………ええ、そういう気持ちもあつたわ。そんな歌はよくあるでしょ。私だって、自分がきれいになったような気がしたわ。でも、それは別の気持なの。ちよつと適当じゃないけど、もつとヒワイな気持ち、かな。……………そんな人がいるの？ あなたの付き合つた人？……………違うの？ 本当？

(疑わしげに)……………うーん。私がつと単純なのね、私は不安になるどころか、得意だつたんだわ。……………でも、夜と昼が違うように違うわけでしょ。そう思えば、少しもおかしくないじゃない。何か別の理由があるんだと思うな。……………あなたと私の二人だけで、あとは無用、無用というか、まるで意味のない世界でしたわ。……………それでいいんじゃないかしら、私はそう思うけど。むしろ、夜と昼ははつきり違うほうがいい。夜も昼なみに明るく、なんて馬鹿げているわ、もつともつと夜が暗ければいいのにな。……………そうでしょ？……………そう、思い出したわ。こんなことを知ってる人は知ってるんだ、と思つたら、自分がとても幼かつたと感じて、そういう意味では不安というか、驚きを感じたことはあつたわね。……………その時の

ことは、あまり憶えてない。感激もなかつたし、たいしたことなかつたのよ。……………え？ そう？ あなたにそんなことを言われるなんて心外だなあ。……………信じられない？ 分かるか、分からないかの問題でしょ。……………こつなつてしまつたから？……………私は、私がこれほど大切に思い、尊重したのは、あなたも私と同じように等しく尊重してくださいって大事にしてくれたからだ……………と思つていたのよ。」

「……………まるで、今日とまつたく同じ夜があつたような気がする。……………いえ、帰宅するとすぐあなたの電話をもらつて、こうしてベッドに脚を伸ばして、何もかも放り出して声を聞いて、長電話でおしゃべりして、その日の出来事を報告して、時間の過ぎていった日。……………毎日のように、あなたからの電話をじりじりしながら待つていたんだわ。……………は今も戻つてきそう。……………違ふということにしたのね。あなたとは八年近くつきあつたのよ。……………ええ、やはり胸がいっぱいになるわ。分かつてくださるかしたら、私があなたを殺すわけではないのよ。」

「……………ええ、そうかもしれない。でも…でも、もう違うのよ。どこがとはつきり言えないし、分からないけど。あなただって、そうじゃない？」

「……………そうね、また淋しくなるわ。本当よ。小さな犬でも飼いたいけど、日中一人にしておくんじゃ、かわいそうよね……………」

「……………ええ！  
名譽心？ どうもうまくあなたと結びつかないような気がするけど、……………そう？  
でも今のあなた冗談だった？ ……  
…よく分からない、そうかしら。そういう女性もいるかもしれないけど、私はそんなこと少しも思わない、そんなことは言うまでもなくお分かりでしょ？……………  
……………でも、こう言ってしまうば、身も蓋もないのかもしいけれど、男社会に合わせてしまった女性を基準に話すのでしたら、議論は成り立たないんじゃないやありません？  
男社会に合わせてしまえば、その名譽心だつてきつと追求するかもしれない。そうねえ…いえ、やはり本気で追求する女性がいるとは信じられないな、男社会に表面合わせていれば

こそ、馬鹿にすることもないでしょうけど、……………ええ、そりや私だつて、（女らしさ）なんて言い方に十分根拠があるとは思えないけど、でも、頭から無視して行動することはできないし、その気もないし、……………ええ、名譽心だつて、ちよつと考えたことないですけど、どうもあまり感じないもののような気がするけど、男性にとっては悪いことじゃないかもしれない。…でも、（女らしさ）と名譽心とどういう関係があるのかしら。まさか、それが女の名譽心だと言いたいわけではないんですよ？……………それじゃ、どうして今その二つが出てくるのかしら。……………それつて、名譽心というより虚栄心じゃないかしら。……………  
……………同じ心の働きが、女の場合には虚栄心と呼ばれ、男なら名譽心だというのは、つまらない差別というものですよ。そういうこと？……………  
……………お話になつてること、よく分かりません。そうだわ、今思いついたけど、それなら、男の名譽心とやらは、本当は虚栄心じゃないこと？……………  
……………なんでおかしいのかしら、凶星なんでしょ？……………  
……………うーん、よく分からないんですけど、私が先手を打つただけだとおっしゃりたいのかしら。……………  
……………ごめんなさい、それじゃ、勝手な想像で先手を打つたとしても、おっしゃりたい

の？」

「……………いいえ、そうじゃないわ。さっきの話にまた戻りますけど、もし男だったら、私が考える時って、そんな場合じゃないのよ。ずいぶんいろんな場面で、この（もし）は出てきたわ、まるで一種の実験とか訓練みたいに。でも、男性のやり方をみて、自分ならそれと違うやり方をとるだろうと思う、という意味じゃないのよ、いつもいつも。……………でも、おつ……………そうね、やり方の問題じゃない、というか、その問題ばかりじゃないというべきかしら。……………でも、……………そりゃ、はつきり仕事の上で、ある男性に対して、もし私ならこうする、という場合もありますよ。でも、……………の。よく聞いてくださいな、私が言おうとしていたの。……………話しは違いますが、あなたのおつしゃつてることに異議がないわけじゃないのよ。女は、ある男性のやり方を批判したって、一般的に、だから男は駄目なんだという結論にはならない。その点、誰か特定の女性に関する批判をしたって、当然のように、だから女は駄目なんだ、というところに持っていくたがる男はいまだにたくさんいるのよ。……………いえ、あなたが、とは言いません。……………そうね、そんな人のこといくら話題にしてもつまらない。…本当に、男の真

似するだけじゃ意味ないわ。……………ああ、そういうことね。それならいくら分かる気がします。ただ批判がましいだけ、みたいな面もあるかもしれません。あなたが言うように、そう見える時って多いかもしれません。……………うーん、そこで憎しみが出てくるの？ ずいぶん、話が違ってきたらうわね、私たちありきたりの夫婦より理解し合っているなんて思ってたのに……………でも、おつしゃるとおりだとしても、そこで私が恨みがましいとしたって、私が悪いのかしら？ まるで、名譽心とやらで頭がいつぱいの男たちが、よってたかっておかしい世界にしてしまったんじゃないの？ そう思いませんか？ ………………でも本当に、男たちは失敗したんじゃないかって思うことがあるの。さっきの赤ちゃんの話しじゃありませんけど。……………ええ、言いたいことはよく分かります。（女は声を出さずに笑う）……………そうよね、地球なんて大きな話にするのなら、要するに（だから男は駄目なんだ）ってところへ持つていくも同然かもしれないのよ。……………ええ、ええ、おかしいわね（女は仕方なしに声を出さずに笑う）。ほんと、だから男は駄目なんだ、って言いたい気持ちなのよ。」

「……………私のこと好きなくせに、臆病

になつて、じれつたくなるような男の表情や動きに、もし私が男ならつて思うことだつてあるんですしね。……まさか、あなたじゃあるまいし。そんなに私は多情というわけじゃありません。……ええ、もちろん、悪い気はしないわ。……お断りしておきますけど、あなたと違って私は独身なんですから。……ふふふ。……仕方がないんでしょね？ 本当に私のこと好きならきつと何とかするわよね。男性のあなたに意見を伺いたいわね。……ははは（女は楽しげに笑う）、まさか女の私が誘惑するわけにもいかないし、……ふふ。本当は笑つて済ませることではないかもしれない、つて思うの。ほかにうまい方法がないかしらね。……そんな意地悪な言い方しないで、いい考えがあったら教えてよ。……こんな軽口がきけるようになったの、あなたのおかげなのよ、きつと。あなたの教育がよかつたんだから、不服はないでしょ？ ふふふ。……ええ、あなたのその言葉を憶えています。私もそう思えば、臆病になつた男の心を許してあげなくちゃと思うこともできるし、それが悪くないとも思えるわ（女はまた嬉しそうに笑う）。……（今度は男の言葉に反応して笑う）

「……え？ 今ベッドの上。……それがあなたのやり方、いつもの……あなたのやり方。（女はベッドから身を翻す）」

「前にあなたに聞いたでしょ？ 男と寝たあと急いで家に帰つてオナニーするという女性のこと。確かその人、娘がいると言つたでしょ。……まあ、そうね。自分の子供を虐待する母親もいるご時世ですもの。そんな未熟な母親もいるかしらね。自分の娘のこと考えないのかしら。……あなたに批判がましいことばかり言うようですけど、ひどい話というより、彼女にとってそんな生活そのものが刑罰みたいなもんじゃありません。そう思えば、やはり同性としては（ひどい話）じゃすまないわ。いま話しながら考えたんだけど、一種の拒食症、性の拒食症じゃないかしら。……食欲旺盛だなんて、その言い方、ずいぶん憎々しげじゃない？ 本当は男にとつても不幸な話だと思わ。やつぱり、あなたの経験なんですよ。……」

「……………さつき、なんて言ったんでしたっけ。へもう愛されないというのは侮辱だ」というお話のその前の部分。……………ええ、それ。へ愛されないのは不幸な話だがへって、それは女性に関する話のつもりなんでしょ？……………あなたは自分が侮辱されたような言い方をしたけど、男性にも言えることだと思うのかしら？……………そうかしら？受け身な言い方をしてるのは、やはり女性について考えているんじゃないかしら？当然、女のとさと考えていなかったという点だけは、誉めてさしあげます。……………いいえ、男たちは、愛されなくても愛せばいいんですもの。それでもつて愛されていると勝手に誤解するところに間違いがあるんですけどね、私に言わせれば。……………おかしいでしょ？でも、この誤解のおかげで、苦しまない男性はおそらくたくさんいるのよ。なかには男性的原理だなんて、得意になっている人もいるんじゃないかしら。胸に手を当てて、よく考えて欲しいわ、というのはジ・ヨ・ウ・ダ・ン。あなたはそんな方じゃありませんでした。……………本当です。……………そういう話じゃないと思いますよ。それなら、たとえばタレントや政治家に限らず、誰だって、愛されようと努力しているとも言えるでしょ。……………そう、ですから、やはり包み隠しのない男女の話なんで

す、そう思いませんか？……………あなたが飲み込めないとすれば、やはり、あなたもまるつきり男性的思考に馴れているのよ。……………どうして、そう思うのかしら。そんなふうに必要なんじゃないんですか？そんな遠慮、遠慮は変ね、そんなふうに自分を押さえ込むのは、男の考え方を前提とするからじゃないんですか。男だって、女と同じようにへ愛されない不幸があることを知るべきじゃないかしら、知らなくては大変だと思うの。それを知らない幸福に恵まれた人は、きつと男女ともいるかもしれませんが、不幸は片方だけなの。……………あなたは、どつちかといえば幸福な方よ。……………はは（女は男の言葉に楽しげに笑う）、そんな意味じゃありませんけど。」……………え？ふふふ、確かにそういう女性もいるかもしれないわね。もう一度言つて。……………愛されれば、それで愛したつもりになる女の人？ふふふ、なんだか、ずいぶん無精な人よね。でもあいにくトノガタに見分けがつかくかしら？」……………恨みがましいかもしれないけど、結婚した女や、結婚して子供作った女や、私はずいぶん、気懸りでなんかじろじろ見てきたような気がする。

：男たちにもあることかしら、あなたのように結婚した男には分らないでしょ？ …… そうかしら？ あなたはそんなことまるで無頓着だったわ。それがあなたのいいところでもあったし …… そうかしら。あなたは深雪さんの彼、藤井さんのことだって、自分の後輩というだけで、どんな人なのかまるで考えていなかったわ。あなたとはずいぶん違う人よ。 …… いいえ、あなたのほうがずっと素敵。 …… そういう意味じゃないの。 …… 一人の男に惚れぬきたい、女なら一度はそう考えるものよ。結婚した女たちがその気持ちを押し通して、どんな苦痛な境遇に陥るか、あなたにはきつと分からない。いろんな人がいるわ。意地になって亭主を祭り上げている人も知ってる。どうする気なのかしら、なんて思うわ。 …… え？ それは、誰？ あなたの奥さん？ …… ええ、冗談。 …… ええ、でも、そんなふうに周囲の同性を見ていううちにやっと、私は自分の母のことをやっと見直せるようになったの、それもつい最近のこと。 …… まさか、女がみんな男を憎んでいるわけはないわ。あなたらしい思い過ごしよ。幸福な人だっているに決まってる。 …… でも、そんなふうに女たちを見られるなら、悪くないことよ（女は声を出して笑

う）。 「 …… やり、お分かりになっていないようね。それは憎しみとは違う感情だと思うわ。憎しみがいつも一緒とは限らないし、 …… そうかもしれない。でもそう仕向けたのはどなたかしら？ あなた方トノガタでしょ？ 先ほど言った、時には、意地でも男を高いところに置いておきたい、愛するに値する男であると思いつけるために執拗にそんな努力をすることだってやりにかからない。そんな同性を私は、結婚しているからつてけなす気持ちにはならない。自分を貶めても、愛していると信じたい。もう呆れて言う言葉がないような心の動きだつてあるのよ。 …… え、誇張じゃないわ。そうね、男の人はそんなこと知らん振りよね、自分が原因だというのに、不思議なものね。そのことだけとつても、だからよしなさいよつて、言いたくなることもあるわ。 …… 私、今あなたのことお話ししているつもりはないのよ。 …… それぐらいなら、電話で長話しなんてしない。 …… いえ、自分の心を覗けば、その男をもうとつとく愛してないと分かるのに、そんなふうに強張つた心にだつてなるものなの。そんな喜劇はもうお

終いにしたらいいの。少しも恥ずかしいことじゃないわ。こんな言い方自体、変よね。でもね、喜劇なんて言ってはいけないのかもしれないけど、やはり女たちが苦し紛れに、自分を正当化するために編み出したやり方なのかもしれない。……そうね、そうかもしれない、これは未婚女性の意見かしらね。でも、そこで区別する必要があるのかしら。既婚の女性には通じない話かしら？（男に聞くより自問するように）……まあ、そうね、そうかもしれない。……でも、あなたが結婚を特別視しているんじゃないかしら。……一挙に流し去ってくれるわ。……そうよ、憎しみはそれやこれやをきつと……そりゃ簡単かもしれないけど、そこにいくまいと踏みとどまるわけでしょ。いろいろ考え合わせてね。……え？ ジカドウチャク？ それって矛盾してるってことね？ ……ええ、おっしゃる意味は分かります。でも、私は矛盾してるつもりはないの、憎しみですべて流してしまえとは思いません。そうなる前に、思い切る方がいいと思ってるの。……うーん、そうかしら、同じことでしょうか。現に同じことだとお考えになる？」

「……………え？ 弁解？ そんな

ふうに思う？ 私はそんなつもりはないけど、そう考えるなら仕方がないわ、……でも本当にそう思う？ あなたらしくないわ。私のこの電話でお話していることが弁解かしら。あなたに話していることを忘れそうになっていたのに、それでも弁解だと思う？」

「……………そうね、今日久しぶりに会った人のなかにもいたわ。本当にこんな人って変わるものかって、内心びっくりしたわ。下手なこと言えないですけどね、……そうよ。私は大丈夫、とは言わないけど、……ええ、気をつけます。ありがとう。……でも、女性は生理的に仕方がない面があるのよ。……あなたにそんなつもりのないことは分かっています。」

「あなたの後輩の藤井さん夫婦の新居にいった時のこと憶えてる？ ……藤井さんと深雪二人は私たちが結婚させたようなものよね。あなたは途中で、どうやら会いに行くのは具合が悪いと思いはじめたわ。……そう？ 赤ん坊に会わせるのが、私にどう作用するか心配になったんじゃない？ ……赤ちゃんの小さな指が私の指をぎゅっと握った時、私あやうく涙が出そうになった。」

……でもね、泣くまいと思うより先に、私、藤井さんは、子どもが欲しいという気持ちより、深雪を自分に縛りつけておくために子供を産ませた、とふいにはっきり分かったの。そう思ったら、泣けなくなつた。……ええ、もちろん、深雪だつて欲しくないわけじゃないのよ。藤井さんに引き合わせるよりずっと前に、彼女からそんな気持ちを聞いたこともあつたし、それは私にはよく分かっている。でも赤ちゃんを見る深雪を見ていて、彼女ちつとも幸せそうじゃなかつた。……いえ、本当よ。深雪も私と同じこと考えているのよ。……女同士は、男たちと違つてずっと気持ちを通じやすいの。いちばん根っこで同じことを考えているんですもの。……藤井さんは、あなたよりずっと、女を支配したがる人よ。……深雪より、彼女の背後の家庭を見ているのよ。大企業に勤めているんだし、家庭を持たなきゃさまにならないでしょ。体面で子供が欲しいだけなのかしら？……あなたはその点じゃ、物足りないくらい。……いえ、褒めてるのよ。……そうよ、だけど、深雪が自分で決めたんですもの。その時、私はまだ藤井さんをよく知らなかつたし。まあ、知つても、私は反対も賛成もしなかつたでしょうけど。……知らないわ、比沙子さんだつて離婚経験者だし、私はそうなつたつて格別、気の毒なことだなんて思

わない。……別に今だつて、深雪とはこれまでどおりの交際よ。……まさか、それを勧めやしないわ。そんなことするわけないわ。……え、離婚したつて、もちろん仲良くやつていける。……でも彼女だつて、どんなふうに変わつていくか分からないし、私があればこれ思うことじゃないわ。そうでしょ？」

「……なぜ、そんなこと言うの（女は冷水を浴びたように驚く）。あなたは決してそんなこと言わない方じゃなかつた？（女は言葉に詰まる）。あなたが私を憎むなんて考えられないわ（女は強いて快活そうな声になる）。……あなたこそ、先回りして弁解を言つたらっしやるのじゃないこと？……だつて、私はあなたを責めてないんですもの（女は自分の言葉に笑う）。……あなたがそんなことをおっしゃるとは思わなかつた（ふたたび沈んだ声になる）。……あなた、きつと疲れているだけよ。……あなた、きつともありがとう。でも、そんな愛情告白つてあるかしら。……だつて、別れるつて段になつてから、そんなことをおっしゃつたつて……」

……大丈夫かどうか、私もあまり自信がないの……あなたはきつとまたさっそく恋をして私のことなんかすぐ忘れるわよ……しやるなんてずるいわ……そんなこと、今ごろおつ……なぜおかしいの？……だって、真意を疑うわ。……だって、そうでしょ？……何よ、自分だって連絡くれなかつたくせに。……あなたらしいわ。……いえ、別にあなたを疑ってとか、憎んでとか……私はあなたを責める気持はありません。……それは私だって、そうよ。でも今さら、互いに値を吊り上げるつもりはないでしょ？……ごめんなさい、そんな言い方して、どうぞ許してください。」

間。

「……いつだったか、もう去年のことですけど、あなたすぐこの公園で私のこと見ていらしたでしょ。私あなたがいるの気付いていたのよ。……」

ええ、知ってたのよ。でも別に……いえ、私はあなたを一度も見かけなかった。なぜあそこいらしたの？……いいえ、私があなたを見つけたと思うでしょうけど、違うのよ、私はあなたの視線を感じただけ。あなたの姿は一度も見なかったわ。まるで目が使えないから、耳や皮膚感覚を総動員したみたい。そばを通ったとき、枯葉が大きな音を立ててがさごそ鳴ったわ。まるで私の耳の中で鳴ったよう。あなたが後ずさりしたのかしら、それとも、前に出て藪のあいだから私を見たのかしら。……え？　そう？　でも……ああ、そうだったの。……え？　そう言えば、確かに花が咲いていたわね。……本当に、あれは不思議な体験だった。……いえ、ベンチから立ち上がってあなたのほうに歩いていく前にね、私がベンチに座って話していた時、突然、自分の笑顔が顔に貼りついてとれなくなつたの、笑いが凍りつくというの、ああいう経験を言うんでしょうね。あらいつたいどうしたの？　なぜ？　何よ、なによつて、本当に内心びつくりした。そのくせ、理由も分からずひどく嬉しかったの。ふざけ散らしたような気分だった。あなたが見ている！　私はとっさにそう思った。そうと分かたら、あなたのほうを見られなくなつたわ。だから、あなたの姿を見かけるはずはないの。そうして、それからあなたの近くを通り過ぎた時、耳

の中でびっくりするぐらい大きな音で枯葉の動く音がした。  
「でも、別にあの時の人とは何もなかったのよ。どうして隠れていたの。」

「アベリア？」  
「よく、憶えていないわ。言われてみれば、小さい花がたくさん咲いてたような気がするけど。」  
「あれが、アベリアというの？」  
「さあ、香りなんて気がつかなかった、駄目、まるで憶えていない。」  
「今ごろ、こんなこと話し合ったりしておかしいわね。もっと前にお話すればいいのに。」  
「瞬間的な表情になる）なぜ、今ごろそんなことおっしゃるの？は、ないわね。私が話したからですものね。そういえば、真夏なのに、そんなに枯葉があったのかしら。」  
「何で、そんなことおっしゃるの？あなたが花の茂みにうづくまって、その香りにむせているところなんて、想像するだけでえ？ごめんさい、なんと言ったらいいか、言葉が見つからない（女は押し殺して笑う、それから何を聞いたのか受話器を押し当てたまま、声を出して笑い、軽く目元をぬぐう）。」  
「つまり、自業自得なんじゃありません？」

「ははは（女はまた楽しげに笑う）。」

「そんな」と聞くもんじゃないわ。ご想像にお任せします。でも、下の公園であなたがのぞき見た人じゃないわよ。」  
「そうね、また心ときめいてみたいのかもしれないわね。そんなことがあるか、さっぱり自信ないんですけど。」  
「本当に、まるで何年前のように高校生同士みたいに、すっかり話し込んでしまいましたね。」  
「ふふ、そうね、私もあなたも好きだ嫌いだ、じゃなくて好きだ好きだで明け暮れて、あなたなんて、今の総理大臣が誰かも知らないでしょ？」  
「ははは（女は嬉しそうに笑う）、それは冗談ですけど、それ以外はいつでもいいような生活をしてきましたよね。」  
「あなたは口がうまいから。」  
「まあ、言える間はせいぜいそう言ってましようか。」  
「でも、本当にそう信じたいな。」  
「きつと、そんなことを考えもしない生活なら、こんな一時もないわよね。」  
「本当にあなたが好きだったのよ（女は目元を拭う）。」  
「いえ、そりゃ夢中だったころとは違うけど、今

だって変わらないわ。……  
……あら、いつそんな過去形で言いました？ 憶えてない。そうでした？ ……ええ、  
いったい何が変わってしまったのかしら。別れるなんて思ってもみなかったはずなのに。……  
……でも、こうしてお話しができて、いづらか気持ちが軽くなつたみたい。どうもありがとう。……  
……ええ、どうぞ、淋しくなったらまた電話をさせてくださいね。……はい、ありがとう、  
……ええ、あなたもどうぞお元気ですね。お酒を飲みすぎないでくださいね。……ふふふ、じゃあね。」

女はしばらく不動。それから大きく息をついて、携帯で電話をかける。

「もしもし。私、栄子です。ごめんなさい、電話が遅くなつて。やっと終わりました。……  
……そうね、さつき遅くにお昼を食べたから、まだあまりおなか空いてないんです。……  
……今日はくたびれたし、もう出ないつもりでいたんですけど、それじゃ、やっぱりで済ませようかしら。……ええ、それじゃあ、この間と同じところにいます。何時ですか。……

……ええ、分かったわ。……じゃあ、あとでね。」

CDをドライブから取り出してケースに入れ、部屋の隅にあった段ボールの中に入れる。室内を見回し、思案して、ほかにも一つ、二つ、物を段ボールに入れる。

それからダンスから男物の服を取り出す。延ばした手の先にハンガーにかかったままの服を持って、しばらく見詰める。丁寧にたたみ、袋に入れてから段ボールにしまう。そしてガムテープを出してくると勢いよく封をする。

明るい色の外出着に着替える。鏡の前で衣装を調べ、軽く化粧を直す。

室内を見回し、明かりを消して部屋を出て行く。

鍵のかかる音。遠ざかる靴音。

無人の暗い部屋に、いくつかぼつんと小さな赤い灯がある。テレビやステレオや電話のランプである。電話が鳴りだし、しばらく鳴って止む。

幕